

# 肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児の スヌーズレンの授業に関する全国調査

○姉崎 弘  
(大和大学教育学部)

KEY WORD : 肢体不自由特別支援学校 重度・重複障害児 スヌーズレンの授業

## (目的)

近年、全国の肢体不自由特別支援学校を中心に、重度・重複障害児などの授業にスヌーズレンを取り入れる学校が増えている。特に新設される特別支援学校でスヌーズレン室(感覚学習室やクールダウン室とも呼ばれる。以下、スヌーズレン室)を校内に設置する学校が見られる。

これまでわが国の肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児に対するスヌーズレンの授業に関する実践研究報告が散見される。また近年学校現場において「スヌーズレン教育」が提唱され、その意義等が検討されている。しかしながらスヌーズレンの授業に関しては、校種を問わずこれまで調査報告がなされていないため、その現状と課題が明らかにされていない。

そこで本研究では、肢体不自由特別支援学校(知肢併置を含む)を対象に、スヌーズレンの授業の現状と課題を明らかにすることを目的に、初の全国調査を行った。

## (方法)

1. 調査対象 全国の肢体不自由特別支援学校(分校・分教室を含む)262校。各学部「知的障害代替類型」、「自立活動を主とする類型Ⅰ(反応豊かな)」、「自立活動を主とする類型Ⅱ(反応乏しい)」の3類型を担任する教師(計9類型)を対象に調査。
2. 調査方法 郵送法による質問紙調査。回答は各類型を担任する教師グループに依頼した。回答は選択式と記述式を併用。
3. 調査時期 2012年1月から3月。
4. 回収率 262校中157校から回答が得られた(回収率60.0%)。

## (結果)

1. 「スヌーズレンの授業の実施の有無と導入した理由」  
類型別では重度児ほど、また学部別では小学部ほど実施していた。導入した主な理由は「リラックス効果(35%)」「主体的な動きを引き出せる(18%)」等であった。
2. 「スヌーズレンの授業の教育課程上の位置づけ」  
主に「自立活動(72%)」と「遊びの指導(17%)」に位置づけられていた。
3. 「スヌーズレンの授業回数」  
週1回(30%)が最も多く、次いで年4回(16%)、年3回(14%)等であった。約7割の学校が不定期に実施していた。
4. 「スヌーズレンの授業の開始年度と実施場所」  
開始年度は、多い順に「2007~2010年(36%)」「2011年~(27%)」「2003~2006年(19%)」「1999~2002年(11%)」であった。また実施場所は、多い順に「普通の教室(41%)」「スヌーズレン室(19%)」「自立活動室(14%)」等の順であった。
5. 「スヌーズレン室の設置の有無」  
校内に「ある学校」は22校(14%)、「ない学校」は135

校(86%)。

6. 「スヌーズレンの授業で使用している器材等」  
多い順に「ミラーボール(19%)」「CDの曲(13%)」「ファイバークロー(13%)」「バブルチューブ(12%)」「ボールプール(10%)」等であった。
7. 「スヌーズレンの授業の指導形態」  
「集団指導(73%)」、「個別及び集団指導(21%)」、「個別指導(5%)」の順であった。
8. 「教師の捉えたスヌーズレンの授業の教育的効果」  
多い順に「リラックスする(30%)」「注視力の向上(26%)」「興味の拡大(25%)」「コミュニケーション力の向上(10%)」。
9. 「スヌーズレンの授業は発達を促す教育であると思うか」  
多い順に、「どちらかと言えばそう思う(53%)」「非常にそう思う(43%)」「あまり思わない(3%)」「全く思わない(0%)」。
10. 「スヌーズレンの授業の配慮点」  
多い順に「感覚刺激の種類や量(27%)」「姿勢保持(25%)」「教室内の安全性(22%)」「教師の私語(14%)」「室外の声や音」。
11. 「スヌーズレンの授業の課題」  
多い順に「研修機会の不足(64%)」「器材等の購入予算の不足(21%)」「教室の不足(14%)」等。

## (考察)

スヌーズレンの授業は、小学部ほど、かつ重度児ほど実践されていたことから、重症化傾向の見られる肢体不自由特別支援学校で、感覚面の初期学習として、さらに心理的な安定等の発達を支援する指導技法・理論の1つであると考えられる。また週の終わりや始め、長期休業明け、授業や行事の終了後といった児童生徒が疲れていてクールダウンやリラックスしたい時に授業の中で実施していたことは、この授業の特色といえる。

これまで、わが国では「スヌーズレンは教育法ではない」(日本スヌーズレン協会)と言われてきたが、今回の調査でほとんどの教師(96%)は、スヌーズレンの授業を「教育活動」として認識していた。それは、教師が児童生徒のリラックスや注視等の主体的な行動を教育活動として評価していたことによる。

今後の課題として、現場の教師が日々のスヌーズレンの授業に確信が持てるように、学術的に信頼のおける「スヌーズレン教育の研修会」の開催と教師の参加が強く望まれる。またスヌーズレンの授業モデルに関する学校現場での実践研究が必要とされている。

## (文献)

1. 姉崎 弘(2013) わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究, 51(4), 369-379. (ANEZAKI Hiroshi)